ランチョンセミナー3

演題名	ボツリヌス治療も在宅必要テクニックでは？ 在宅医療における痙縮患者の治療と管理の提唱

概要

在宅医療の推進に関する検討会（厚生労働省　日本医師会など）は、在宅医療に必要な医療機器の更なる小型化や医療技術の更なる開発を提言し関連学会などの動きに期待しています。在宅医学会は、在宅医学のテキストを編集し、各病態における在宅医に必要な機材や技術を紹介しています。私は、これを基礎にして在宅に必要な医療技術を、更に発展させればよいのではと考えています。

ボツリヌス治療という痙縮に対する注射手技は、在宅医学のテキストにはいまだ紹介されていません。しかし私は、在宅においてとても有効な治療手技ではないかと考えています。最初に私がそのことに気づいたのは、手のひらにできた褥瘡の処置の相談を受け時きでした。その患者は、圧迫軽減のためにガーゼを各指に巻き、手掌にゴムを挿んで悪化を防ぐ処置をしていましたが、なかなかよくなりません。この患者の病態を痙縮によるものと見方を変え、ボツリヌス治療を行い、手指の痙縮の軽減をはかりました。すると、褥瘡が治癒したのです。以前から、体位が屈曲変形した患者の介護困難例での、ボツリヌス治療は有効であることは知られていました。しかし一回の治療で褥瘡が治癒した症例を経験し痙縮の改善として在宅でも、ボツリヌス治療の価値があるのではと考えるようになりました。

上肢の痙縮が強く呼吸時の胸郭運動に支障を来す症例では、体位によって、大きく酸素濃度が変わり、夜間に在宅酸素が必要な場合もあります。その時、ボツリヌス治療を行うと、在宅酸素から離脱できる症例もありました。

在宅患者を痙縮という病態概念で見つめ直すと新たな展開が見える場合があります。その時、在宅でのボツリヌス治療を考えてみてはどうでしょうか？在宅では疾病一つ一つについて考えるだけでなく、例えばがん末期患者とか気管切開患者というように系列化して考えることも大事です。痙縮についても、疾病の違いを超えて、痙縮で困っている患者としてとらえる概念も必要だと感じています。

もちろん在宅医療では、一つの医療技術だけを取り出して語ることはできません。在宅での必要な考え方（キュアからケアへの転換）やツール（在宅レントゲンやエコー）にも言及して、ボツリヌス治療についてお話ししたいと思います。